

通信「所長のつぶやき」

今月号(2025年4月号)から、岡山ライトハウス点字出版所の志水克典所長の通信「所長のつぶやき」を連載します。「共感できるわ」とか、「へえ、そんなことってあるの」など、ご感想等がございましたらありがたく頂戴いたします。

第1回 自己紹介①

私は、1956年10月に愛知県知多郡で生まれました。日本で初めてオリンピックが開かれる8年前のことです。

愛知県というと都会(?)の感じがするかもしれませんが、私が生まれ育ったのは名古屋から名鉄の特急電車で1時間ほど南に走った所です。三河湾に面した半農半漁の町で、私の家はミカンを中心とした農業をしていました。

私は、先天性白内障と小眼球です。子どもの頃の視力は、0.02 ぐらいだったと思います。

私が5歳になったとき、妹は3歳。妹と一緒に通わせればいいという親の方針で地元の保育園に入りました。でも、活発な男の子たちとは遊ぶことができず、女の子たちと遊んでいました。

当時、私の親は、盲学校の存在を知らず、地元の小学校の障害児学級(知的障害)に入れないといけないのかと思っていたようですが、なんという偶然でしょう！ 同じ地区から名古屋盲学校であん摩やはりを学びに行っている大人の方がいることを知り、その方に盲学校を紹介していただき、とんとん拍子で愛知県立名古屋盲学校小学部への入学が決まりました。

保育園では「自分の顔を描こう」とか、「日の丸を作ろう」とかという課題があり、どうしても円が描けなかったのですが、その時は悔しいというより、どうして自分には描けないのかと不思議に思っていました。盲学校に入学し、当時始まったばかりの弱視の訓練を受け、こういった訓練がなければうまく描けないのだなと、子どもながらに実感しました。

今振り返ってみると、盲学校をずっと知らなかったら、私の人生はどうなっていたのかと、ちょっと恐ろしいものを感じてしまいます。

筆者：志水克典(岡山ライトハウス点字出版所 所長、元岡山県立岡山盲学校教頭)